

八ヶ岳森の恵み会とは

「八ヶ岳森の恵み会」は、筑波大学八ヶ岳・川上演習林をサポートするボランティア組織です。

八ヶ岳・川上演習林では、地域に開かれた大学演習林を目指しています。その具体的なアクションの第一弾として、事務所のある 14 ヘクタールの林を「恵みの森」として 2015 年 10 月から地元の方や観光客に開放しています。今回の森の恵み会発足は、恵みの森（名前がややこしくてすいません！）の一般開放に続く第二弾というわけです。

八ヶ岳・川上演習林では特徴の違う 3 か所の森を管理しています。これらの森をフィールドとして、楽しみながら森林資源や自然について学び、活用し、さらに

ちょっぴり私たちの仕事も手伝ってもらおうという趣旨です。当演習林のある八ヶ岳東山麓、野辺山地方は自然の豊かなところですが、地元の方、特にお子さんは、自然を直接相手にする機会が意外に少なかったりします。そんな方たちに、森や木、草花、動物と触れ合う楽しさを味わってもらえればうれしいです。

活動拠点となる「恵みの森」（14ha）は、JR 野辺山駅から歩ける距離ですので、東京方面から鉄道や高速バスでも行けます。周辺には国立天文台やシャトレゼリゾート、清里のキープ協会など、魅力的なスポットもありますので、夏に避暑がてらにお手伝いいただくことも可能です。入会をご希望の方は下記の事務局までご連絡ください、お待ちしております。

会員の特典

会の趣旨から、八ヶ岳・川上演習林をサポートしてもらうことが活動の中心になりますが、会員であることのメリットも少しは用意したいと考えています。

- ・イベントの案内や豆知識などを載せた会報、「森の恵み通信」をメール添付または郵送にてお送りします。年に 6 回程度の予定です。

- ・演習林内や周辺の季節のたよりを月に 2 回ぐらいのペースでメールで配信します（メールつうしん）。
- ・演習林内で不要木などが出ればお知らせして優先的に配布します。薪などにご利用いただけます。また、会員に限ってウッドチップなども持ち帰り可能です。
- ・イベント時やお手伝いの際には宿泊施設やセミナー室をご利用いただけます（空きがない場合や授業等で使用中を除く）。

会長のあいさつ

皆さん、こんにちは。八ヶ岳・川上演習林の藤岡です。設立総会で会長を仰せつかりましたので、簡単にごあいさつさせていただきます。

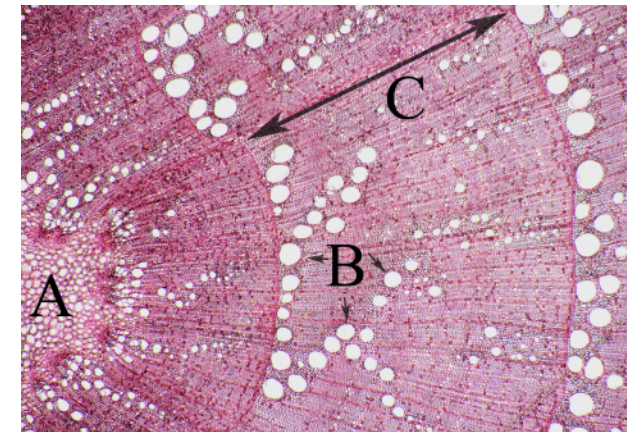
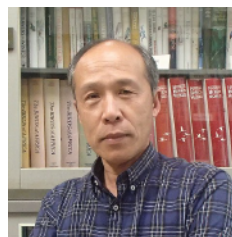
八ヶ岳森の恵み会は、言うまでもなくボランティア組織です。ただ、他の森林関係のボランティア組織とちょっと違うのは、筑波大学八ヶ岳・川上演習林（略して八演、やつえん）を活動の舞台として、八演の事業を手助けするところです。そういう意味で、八演ではサポーター会と呼んでいます。

サポーター会であることにはメリットもあります。八演にある施設や実習用の道具を使うことができます。ちょっと学術的な活動に参加したり、専門家の話を聞いたりもできます。若い学生からパワーをもらうことも

あるかもしれません（逆かも）。

私は森の恵み会の会長かつ八演の林長という立場になりました。これは、会の助走期間の暫定的な役割と考えています。これから学外者 3 名を含む 6 人の役員で会を切り盛りしながら、さらに会員の自主的な活動をうながして、先々はもっと独立したボランティア組織に育ってくれればと願っています。

活動内容や経費を大学と森の恵み会でどう仕分けるのかなど、しばらくは試行錯誤が続きます。でも、皆さんといっしょに森林や木材を通して楽しく、息長く活動するという方針だけは揺らぐことはありません。どうかよろしくお願いします。



八ヶ岳・川上演習林見学会

雨が降るかな、持つかな・・・と言う空模様の7月17日（日）、25名近くのメンバーが集まった見学会、山林の一部である川上演習林、高原の平坦な中間湿地帯を有する八ヶ岳演習林、そして恵みの森の計3か所をほぼ半日で“各演習林の特徴やその自然を知る”と言う、意外に盛りだくさんのイベントとなりました。

まず最初に恵みの森にて、仕掛けておいた「ピットフォールトラップ」や「シャーメントラップ」に昆虫や小動物が入っているかを皆さんで確認に行きました。ピットフォールトラップは地面に埋め込んだコップに、無臭の中性洗剤の水割りを入れて昆虫を捕獲するモノです。結果的に生きた状態で捕獲は出来ないのですが、こうしないと昆虫は共食いしてしまう事も多い為に仕方ないと。シャーメントラップは、金属の箱状のネズミ捕りの様なモノ。一つだけ動物が入っていました。

アカネズミ、可愛いらしい顔をしていました。藤



岡先生の講義を聞き続けることができず、途中で（無事に）脱走しました。恵みの森で、遅しく生きていて欲しいモノです。

恵みの森で拾った長い松かさ。この辺りで見られる外来の松、ストローブ松の松かさでした。この松の歳は節の数で分かるとの事。確かに竹の様な節が見えます。動物に興味があった私ですが、植物を知る事も楽しくなって来ました。

そして事務局の車両とメンバーの車両に分乗し、最初の目的地、川上演習林へ。シャトレーゼ・スキーリゾートの駐車場エリアから右の林道へ進みます。短い間でしたが、ダートが楽しい道のりでした。人生で一度どうしてもこの眼で野生（？）のヤマネを見てみたい私、相当期待していたのですが今回は残念ながら出会う事が出来ませんでした。

ヤマネは木の枝を伝って移動する為、低いと入り難いので紐でエレベーター操作出来る巣箱を6mくらいの所にかけています。ヤマネ等、森の小動物達を観察するには知恵と工夫が必要なんだなぁと感心し、後アイデア出しにも協力出来れば、と思えるヒトコマでした。

一方、ヤマネは低い木で食事をとる事も確認されていて、下層植生を枯らして餌を取れるかを調べる為に“人為的に枯らす区”と“枯らさない区”を作って生態を観察しているとの事。単に「自然を大事にしよう」と言う一般的なエコ・アクティビティは異なった、研究らしい活動だと感じました。

深い森は楽しさだけでなく危険も取り揃えています。ヤマネのお宿を覆って肥大しているクロスズメバチの巣、人によっては近づいただけでも被れる可能性のあるツタウルシ等、ボランティア活動の際には“気合いと万全の準備”も必要と認識しました。

全般に見事なカラマツを中心に、自生したシラカバやミズナラ等、美しい木が沢山並んでいました。カラマツは大体30mまで伸びるとの事。間伐を行ったエリアの木は太く、混み合った場所の木は細く育っていました。地面に光が当たる事で若い木々も育つ様になり、森を育てると言う上では“間伐”と言う作業の大切さを知る事が出来ました。

一旦昼食を摂りに恵みの森へ戻ってから、また車で八ヶ岳演習林へ移動。こちらは国道から300、400m程八ヶ岳側に向かった地域です。高層湿原は雨水だけでできる湿原、低層湿原はそれを堰き止めて出来たもので、ここはその中間の“中間湿原”です。昔はここ野辺山にも沢山あったのですが、農業が盛んになるにつれて水をせき止めたりした事で減ってしまい、今や貴重な中間湿原との事です。

その中間湿原の象徴、ヌマガヤが沢山生えています。尾瀬の様に、水芭蕉等のキレイな花は少なくイ



できたゲートを通りゆっくりと進み目的地の駐車場に着く。緩やかな坂道の林道に雪が融けて凍ったところが、ところどころにある。朝10時を過ぎたとはいえ、静かに緊張した空気がそこにはある。しばらくすると1台、2台、3台・・・と会員を乗せた車が到着。約20名が集い何となく活気がつく。

整備された林道を登り始める。左右に植林されたカラマツ林、所々に残る北面の雪、実生の雑木、低木、まっすぐ伸びたカラマツの間に太陽の光が差し込む。秋のカラマツの紅葉も好きだが、早春のカラマツ林のこの風景は特に良い。

早速、「足跡はなんだろう」という声がする。藤岡先生はその見慣れた足跡に「鹿です」と、次いでその理由を説明された。足の蹄の形を先生の右手で表し雪面についた足跡と同じようにする。具体的である。誰にでも分かる。立ち枯れた何本かの木の幹にフィールドサイン。先生の説明によると樹皮を食べた跡、鹿の角を研ぐ跡、体をこすりつけた跡、それぞれの違いがあると言う。ご自身の頭や体を使って鹿の真似をしてみる。これも具体的である。確かにそう思う。

杉山先生がマウンテンゴリラの鼻糞ほどの野兎の糞を拾ってきて、ウサギの糞と狸（？）の糞の違いを説明された。会員から笑いが出た。

帰り道、誰かが小鳥の巣を差し出して「これはなんの巣ですか」と質問。名探偵藤岡先生と質問者で会話が繰り広げられる。「これはどこにありまし

たか」「上の方です」「ではそこへ行きましょう」「誰が見つけたか」「そこはどんなところでしたか」「ちょっと分かりません」「その巣は、どこにあったものですか。そこにあったものですか。どこからか飛んできたものですか。落ちてきたものですか。それが知りたい」と質問を続けた。結局その場所には行けなかったものの、藤岡先生のその質問に多分私だけではなく、名探偵コナンと化した藤岡先生の推理力に「流石、なるほど」と思ったに違いない。林道からゴルフ場の一部が見える。冬でクロウズの芝から春の気配を感じる。木々の間から赤岳、横岳も静かにそこにある。光を浴びて青い空と雪の白さが、稜線をくっきりと浮かび上がらせている。

昼食はカップ麺、スープ、コーヒーなどいろいろと準備をしていただき、遠慮なく暖かく頂くことができました。いつもおんぶに抱っこで申し訳なく思っている次第です。余談になりますが、小さい頃猟師に連れられウサギを捕りに行った。ウサギは全速力で逃げる。もう大丈夫だと思って立ち止まり振り向く。その時を待ってドンッと撃つ。後ろ足を掴んで持ち帰る。今夜は暗闇鍋だ。CWニコルさんの話を聞きに行ったとき、ウサギの腸を取出し割り箸ほどの棒を腸に入れてひっくり返す。腸の内側をきれいに洗う。イワナを焼くように塩をふって囲炉裏で焼く。塩をふっただけで焼き鳥を食べるように口の中に入れる。珍味だとCWニコルさんは言っていた。ウサギを捕まえたらぜひやってみましょう。（権守）

冬のアニマルトラッキング

■ 雪上の宝探しを体験

定年退職を期に松原湖高原の山荘で多くの時間を過ごすようになって、ここ数年は薪づくりにはまり、毎年丸太を入手し、玉切り、運び上げ（我が山荘は駐車場から 8 メートルほど高い位置にあるため、玉切りした材を背負子に背負っての運び上げとなる）、薪割り、収納の一連作業が秋の恒例作業となっていました。今年はたまたま 5 トンものナラ材が格安で手に入ったので、秋に畑仕事の合間、横浜との往復をしながら何とかすべて終了しました。収納場所の関係で今後 1～2 年は薪作業が不要になるとか思われたので、来年の秋の楽しみのために森林ボランティアでもやろうかとネット検索していたところ、たまたま「森の恵み会」の薪づくり体験会がヒットし、その場で入会して早速参加しました。チェーンソーや斧の扱いや手入れ方法、などさすがに「プロの技」と感得しました。

2 月 26 日にはアニマルトラッキングを実施するというので、これまた雪の降るたびに山荘周辺やテラスにまで小動物の痕跡が多く見られながら、動植物にはとんと疎く、別荘地の木々も、冬に落葉してしまえばそれこそ落葉松と広葉樹の区別もつかず、山荘に来訪する小鳥たちの種別も全く判別できない私にとって、天恵の企画と言うことで参加することにしました。2 月下旬は本来ならば一番積雪の多い時期。アニマルトラックを追いながらのスノーシューでの野山歩きを楽しみにしていたのですが、残念ながら直前の木曜日に大雨が降り、気温も上昇したため雪解けがすすみ、解け残った雪上のわずかの痕跡を探すというアニマルトラッキングとしては最悪のコンディション。それでも、当日はピーカン。風もなく春間近という日差しが降り注ぐ快適な一日となりました。10 時 10 分に管理棟に集合、若干の説明を受けた後全員で車に分乗、川上演習林に

向かいました。川上演習林では雪解けで凍結した林道を、アニマルトラックを求めて 2 時間ほどフィールドワーク。上述の最悪のコンディションの中でも、ご案内いただいた藤岡先生や杉山さんのお蔭で、普段なら何気なく見過ごす道ばたの足跡や、笹や木に残された鹿の食痕、角の研ぎ痕、兎や鹿の糞などを発見、まさに雪上の宝探しとなりました。

鹿が増えると再生力の劣るスズタケが減り、再生力の優れたミヤコザサが増える、というお話や、群れで動く鹿は先行する鹿の足跡を忠実に追うというお話など、初めて聞く話に感心し、鳥を見るたびに鳥の種類を言い当て、樹種を識別するスタッフの皆さんに目を見張りながら、フィールドワークを無事終了。その後は野外活動棟に戻って昼食。それぞれ持参したお弁当を、杉山さんの新兵器ケリーケトルでわかしたお湯で、事務局用意のカップスープを頂き、温かい日差しを浴びながら食べました。

その後、今年の活動を振り返って意見交換。チャットワークを活用した交流・活動の活発化や、本来の目的の一つでもある演習林の活動へのお手伝いなど様々な意見が出され、今後の活動に生かしていくことが確認されました。

追記ながら、翌朝松原湖高原ではうっすらと雪景色。早速昨日の復習ということで別荘地内でアニマルトラッキングを行いました。畑で育てる食べられる植物や、丸太になった薪材ばかりでなく、別荘地の草木や動物にも関心をもつきっかけになった一日でした。今回もまたお世話いただいたスタッフの皆様感謝申し上げます。（園部）

■ アニマルトラッキングに参加

背後より私を呼び止める声。嫌な予感。藤岡先生である。「いつもご夫婦で参加頂きまして・・・」今回のアニマルトラッキングの感想や報告文を書いてくれませんかとのこと。嫌な予感が的中。心臓の弱い私にとっては心拍数が一気に 120 に上がる。何となく汗が滲むのを感じる。そもそも今朝 2 時半まで友達が遊びにきていて飲んでいた。友達をそっちのけにして布団からそのまま這い出して、かけつけた森の恵みの会アニマルトラッキング。

何の用意もないのである。と言うわけで、2 月 26 日朝 10 時 10 分頃管理棟にて藤岡先生より本日のスケジュール等の説明あり。説明では 10 時 20 分川上演習林に移動。10 時 40 分頃歩きながら動物の足跡、痕跡などを探す。14 時頃野外活動塔にて焚火と昼食。15 時から意見交換会と先生の説明。私は杉山先生の車に同乗させていただく。シャトレーズスキー場の駐車場を過ぎると、角パイプで



ネ科の草が多い事も特徴との事。勉強になりました。そしてこの湿原を歩き回る為の木道です。カラマツ製。平成 17 年に完成したので大体 10 年モノ、そ



ろそろ老朽化が始まってしまっています。今後のボランティア活動の中で、湿地エリア以外の木道を外す作業を行っていきます。

藤岡先生から動物撮影用カメラの説明をして頂きました。赤

外線検知で自動撮影を行い、エネルギー 12 本で 2、3 ヶ月持つとの事。私の野辺山庵にも欲しいな、と物欲を駆り立ててくれました。

時間の関係で八ヶ岳演習林にはあまり長い時間いる事が出来ませんでした。今後の活動を期待出来る様な自然を知る事が出来、途中メンバーの歩みで壊れた木道をみて「おお、危ないな」と、作業への意欲（？）が生まれました。

恵みの森へ戻って来て一旦解散。完成した周回路を回りながら赤いリボンをつけたミズナラの若木をみて、彼らが大きくなる様をこの森と一緒に見続けたいと思いました。（細山）

恵みの森の動植物調査

■ 哺乳類調査グループ

8月7日（日）10:10～の哺乳類・昆虫・植物調査に参加させて頂きました。前日に恵みの森に仕掛けてあった40箇所前後の罠（シャーマントラップおよびピットフォールトラップ）に何が入っているかの確認および罠の回収作業です。

3班のうち私は哺乳類班に入り、恵みの森の中を廻りヒメネズミ1匹、アカネズミ4匹がシャーマントラップに掛かっているのを確認しました。各個体を計量したところ、ヒメネズミは22g、アカネズミは31～41g。残念ながらヒメネズミは死んでいたため、標本にするとのことでしたが、アカネズミは捕獲した場所の近くに各メンバーが一匹ずつリリースしました。小気味良くびよんびよんと跳ねながら森に帰って行きました。家族や仲間からははぐれたかも知れませんね。ごめんなさい！私がリリースしたのは最大級の41g。愛らしい眼をしています。

午後からは、前回ハケ岳演習林に仕掛けた自動カメラのデータ回収をしながら、電池交換を行いました。何が撮影されているか写真のコマ毎にエクセ

ルファイルに記録し、大学側に最終的なとりまとめのため提出致しました。被写体としては、アナグマ・猫・シカ・ハクビシン・キツネそして人間。関係者だけではなく、ランニングする人等、立ち入り禁止地区に無許可侵入者の様子も撮影されています。

一度に3枚まで連写される設定ゆえ、動きが早いキツネやアナグマは、3枚中1～2枚に身体の一部だけちらっと写るケースが多いですが、シカは割と悠々と下草を食している様で、数頭が群れで来て、また茂みに帰るのでしょうか？また、昼夜問わず行動している様子も撮影写真から推定できます。

森林というのは、哺乳類だけでなく、昆虫や植物も含め多くの命を育んでいる大切な環境なんだな、と改めて実感しました。また今後、季節ごとの自然の変化を肌で感じ、恵みの会で色々と勉強する機会を作って頂き感謝しています。（似鳥）

■ 植生調査グループ

植物調査グループでは、井波リーダー兼インストラクターの指示のもと、7名で調査を行いました。

1. 調査方法 調査は、方形枠（コドラード）を使った調査を行いました。調査対象区画に約10mのロープを張り、そのラインに沿って1m四方の方形枠（コドラード）を地面に置く。その枠内に生えている植物の種名を同定し、種ごとの被度をパーセント単位で記録。被度とは、枠内でその植物が生えている面積割合のことで、いろいろな植物の葉が重なっていても、真上からみて一番上に出ている種の葉っぱの面積で評価。（今回は、葉っぱが重なって見えない下層の植物種も、被度0%として種の同定を行った）方形枠には10cm刻みで黄色のテープが巻いてあり、それを目安に10cm四方なら1%の被度というように評価。（全体での合計は100%になり、

たのも、見たのもこれが初めて。野外に燃える様子は、なかなか「カッコいい」！乾燥した丸太を使って作るそうだが、自分でも作って楽しみたいと思ったり、2月の野辺山のキャンドルナイトでも使えるのでは、と勝手に想像してみたり…。とにかく、目からウロコの、薪づくり、おいしい鹿肉料理、スウェーデントーチなど、楽しいイベントでした。

これまで「森の恵み会」の行事などへの参加は、演習林の木道補修少々、演習林見学、鳥の調査、そして今回のイベントでしたが、スタッフの皆さんは、お忙しい中、大変ご苦勞をされていると思います。また「この樹木は何でしょうか」「庭に新しい樹木を植えたいのですが」「この足跡は何？」「野鳥の生態、行動についての疑問」などの質問にも丁寧に答えていただいたことに改めて感謝です。

チャットグループなど、ネットワークづくりもすみ、ますます楽しくなりそうな「森の恵み会」。会に参加した動機は、「演習林を通じ、ハケ岳の自然を知り、いろいろ体験したい」「自然を大切にすることをしたい」同時に、「定年後、少しでも社会的に貢献ができないか」という思いから。ボランティアとしての活動にも積極的に関わられるよう、自主的に活動できるようにしていきたいものです。（大淵）

■ 薪割りイベント参加レポート

今回参加してみて、本当に多くの方が薪に関する事に興味あるんだな～と感心しました。みなさんは生活スタイルの中で必須に追われて薪を確保する為に参加したのだと思います。しかし、私は薪ストーブをやっていません。知り合いが薪ストーブをやっています。それを手伝わされているうちに、次第に

『チェーンソーオタク』になっていきました。最初は農機具屋さんから処分する工具を譲っていただいて、それを修理して復活させるのに快感を覚えました。現在チェーンソーは5台所有していますが、一度も新品を所有した事はありません。あまり農機具屋さんの営業妨害になるので大きい声では言えませんが、結構、ちょっとした不具合でみなさん廃棄してしまうのですね？ほんの少しの分解清掃だけで問題無く、新品同様の工具や機械がほとんどです。私の様な貧乏人にはうれしい限りです。それでもやはりカットしてみると、刃の研ぎ方・使用方法などに奥が深い事に気付いたり、伐倒から枝払い・玉切り・薪割りと経験を積んで来ました。ですから、私の様に機械がいじるのが好きな方ばかりでは無いと思いますが、工具も普段のメンテナンスは必要かもしれませんね。今回はそのメンテナンスなどの講習や座談会までは出来なかったので今後はそのような機会もあるとうれしいですね。

幸い現在まで大きな事故・ケガはありませんが、ちょっとした不注意から取返しの無い事故やけがを発生しかねません。今回も多くの方から勉強させられました。今後の教訓にして精進したいと思います。

今回のイベントではプロの方から素人まで総勢30人近くが参加でした。これだけの人数がいると刃物系扱うので、すごく作業周りが気になります。せめて危険性のある作業では10人ほどの少人数でグループになってやるべきです。その理由も踏まえて最終的には場所も大きく利用確保して、グループごとに分かれて作業が出来ていたと思います。やはり、人生経験を踏んできた方達だけに活動がしやすいですね。私は中学高校の非常勤講師を経験してきた関係上、こんなにスムーズな授業はなかなかありませんでしたから…。

野外活動棟にて薪ストーブの実演もありましたが、ストーブひとつ取っても奥が深いですね～。値段もピンきりでしょうが、生活の中で長く付き合う、重要な道具でしょうから、より多くの情報を吸収し、決めなければなりません。火を上手に扱えば素晴らしいライフワークが広がりますね。私も早く資金と時間に余裕が出来て、薪ストーブのある生活をしてみたいな～と改めて思いました。

今回のイベントの中でも楽しみだったのが昼食のひと時…。アウトドアなイベントとしてはメニューが素晴らしい物でした。これだけの物を用意して下さったメンバーの方、お疲れ様でした。非常においしかったです。やはり、『腹が減っては作業は出来ぬ』ですかね。まあ好き勝手な感想を述べましたが、なかなか大学という環境で難しい点もあると思います。失礼しました。（成沢）



薪づくり体験会

■ 目からウロコの薪割りなどなど

海ノ口自然郷に山荘を建てて 5 年。昨年 4 月からは、1,650m の山荘暮らし中心の生活が始まりました。この間、敷地内のカラマツ、コナシなどの樹木（直径 20cm から 30cm）は、ひとり木こりで 20 本以上を伐採してきたのですが、今回、ミズナラの伐採・玉切り作業を学び、いかに危険で自己流であったのかを実感することに…。

「特に危ないのは、かかり木」だそうで、これは今まで 2 回も経験し、一人でロープを引っ張りやっ

と倒しました。チェーンソーを使う際は、「保護めがね・耳栓・ヘルメット・チャップスを必ず装着」することと言われたが、耳栓・チャップスは持っていないし、保護めがねはしないことも。さらに、「薪割りは、玉切りからせいぜい1、2 週間のうち。切ってから時間が経つと切り口だけが乾いて固くなり、斧が跳ね返されるから」と教わり

ました。これは、最近他の人からも聞いて、えっと驚いたことです。それまでは、玉切り後、何ヶ月も乾燥させた方が割りやすいと思い込んでいました。そういえば、30cm の玉切りしたカラマツの薪割りは、10 回以上斧を入れてもなかなか割れないこともあったなあ！これも、最近知ったことで、大きい玉切りを割るときは、円周の端から斧を入れていく

といったか。まだ実践していませんが…。

薪割りの姿勢も、「斧の重さを生かして腰を落と

な方…とにかく、安全第一で、マニュアルに忠実にいこうと思いました。さらに、ストーブ使用上でも新たな知識が！薪の乾燥は、含水率 15% 以下が目標。さらに、含水率計を使うと良いということで、購入を検討しています。日本の豊かな森林資源を守り、有効に使う。薪づくりを通して、まだまだ学ぶこと、考えることが多いと気づく体験でした。

鹿肉は、昨年、上田のレストランで食したのが初めて。しかし、このときは挽肉で、味がよくわからなかったが、今回は鹿肉カレーに鹿肉ロースト！カレーは、くせがなく、柔らかくおいしい。何のニク!?これが鹿肉か、へえ～!!

鹿肉ローストは、レア気味の焼き具合。恐る恐る食してみると…「うまい!」「肉は軟らかく、味は野生の旨みがじんわりと舌にとろけてきた」これなら、十分レストランに出せるのではないかと、みんなの感想でした。すじ肉の煮込みが、ストーブの上でグツグツ煮え続けていましたが、時間切れで、これは食べることは、できませんでした。ちょっと残念！鹿肉料理を準備されたみなさん、本当にありがとうございました。ごちそうさまでした！

鹿が非常に増えて各地で問題が出てきています。自然郷でも樹木や山野草が食害にあっているのが痛いのですが、ただ狩猟するのではなく、ジビエ料理や皮の利用など、削減のための積極的な手立てとして考えられないでしょうか？

焚き火のまわりで、マシュマロを焼いていたら、焦げました。杉山さんが用意してくれた、スウェーデントーチでやってみると、ほどよい火加減で、ちょうど良い感じ。スウェーデントーチというものを



7 4



100%未満の場合は地面が見えているということ）植物の種名がわからない場合は、仮の種番号を付けてサンプルを採取し（サンプルは調べやすいように茎から採り、できれば花の咲いているものがよい）、ビニールテープに場所と種番号を書いて巻きつけた上で、乾燥しないようビニール袋に入れて持ち帰り図鑑で調べる。調査対象区画は恵みの森内のズミの小道の脇と南門近くの歩道の脇の 2 ヶ所。2 班に分かれ、それぞれ調査対象区画ごとに 2 回ずつ、計 8 方形区調査。

2. 調査結果 全 8 区画で 44 種、一区画平均 20.5 種の植物を確認することができました。メマツヨイグサ、ヒメジオン、ミヤコザサ、ヤマドリゼンマイ、シシウド、オミナエシ、カワラナデシコ、ヒメシロネ、ヤマカモジグサ、ツルカミカワスゲ、スズサイコ、ノハラアザミ、ヨモギ、アケビ、ズミ、ミヤマザクラ、ヤマブドウ…などなど、知っている植物から、全く聞いたことのないものまで、様々な種がありました。

3. 感想等 植物に関する知識が足りず、種を同定することがとても難しかった。図鑑で調べても、言葉がわからなかったり、花や果実など特徴的なものが確認できないと判断できなかったり、自信を持って同定できないものもあった。

今回の調査はリハーサルとのことで、調査方法を知って同定するくらいまでしかできなかったが、調査対象区画の環境状況等も含めて比較検討できるとおもしろそう。植物について様々な知識を得ることができてよかったです。（森泉）

■ 昆虫調査グループ

私は、大学で植物の勉強をしていた他、ゼミナールの活動で環境教育や動植物の調査などをしたこ

とがあり、卒業してからも大学で学んだことを活かせる活動がないか探していた時に、「八ヶ岳森の恵み会」の情報を見つけ、活動内容もとても楽しそうな内容で、大学で学んだ知識も生かせそうだなと感じたので、会員として参加することに決めました。

仕事や家の都合などもあり、中々活動に参加できず先日の8月7日に行われた動植物調査が初参加の活動となりました。私は昆虫の調査のグループに入り、ピットフォールトラップの回収と捕獲した昆虫の同定作業を行いました。

ピットフォールトラップは、中性洗剤を入れたコップを地面に埋めて落とし穴のようになっている手軽なトラップで、今回は中性洗剤の他にカルピスの中に入れた二種類のトラップが仕掛けてあり、想像していたよりも多くの昆虫が捕獲できていたので、驚きました。

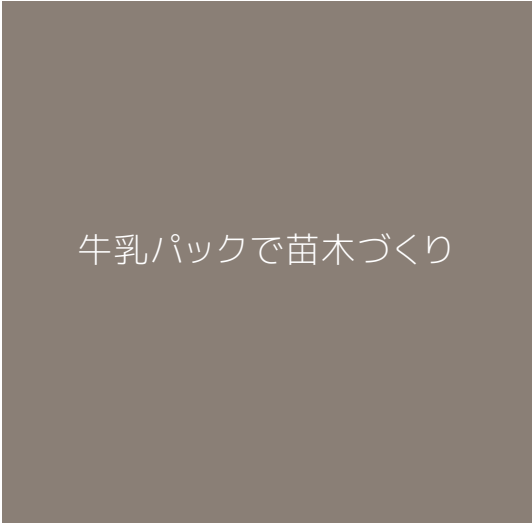
捕獲した昆虫の中には、同じ虫も大量に捕獲できていたのですが、顕微鏡を使わないとよく見えないくらい小さな虫やバッター匹でもとても種類が豊富なので、その後の同定作業がとても大変でした。結局、同定作業は時間内に終わらず、同定が済んでいない昆虫はアルコールに漬けた液浸標本にしてその場を後にしました。

ぱっと見た印象では、オサムシの仲間のクロナガオサムシやアリなどが多く捕獲できていましたが、アリと一言と言っても何種類か捕獲できており、どんな種類のアリがどんな場所で捕獲できているのかを見るのも楽しいかもしれません。

同定作業はとても大変な作業でしたが、図鑑を見ていると自分の知らない虫を見つけたことやこんな昆虫がいるのだと再認識することもあり、楽しい作業でもありました。

中々活動に参加できませんが、これからもできるだけ多くの活動に参加できるようにしたいと考えていますので、どうぞよろしくお願いいたします。（柳澤）





■ ドングリの採種と苗づくり

10月9日（日）、時折小雨が落ちてくる中、ドングリの苗づくりに参加させていただきました。まずはじめに、事務所で苗づくりの方法と、今回の主役であるドングリについてのレクチャーを受けました。ドングリのできる量には年によって豊凶があること、実の中にタンニンが含まれていることによりネズミなどに一度にたくさん食べられないようにするなど、身近にある小さな実の中にも生き抜くための知恵がこんなにも秘められているのだと驚かされました。

その後、事務所の車両とメンバーの車両に分乗して、キシヤスデの観察とドングリの採種に出かけました。観察ポイントでは、落ち葉の堆積した側溝や石垣に目を凝らすと、ゆっくりとうごめくキシヤスデを確認できました。目が慣れてくるとそこかしこにたくさんの姿が見えます。小さなたくさんの足で忙しく動きまわり、くりくりとした目をした意外と愛らしい顔をしています。そんな彼らは、この地域に生えているカラマツの葉を分解している立派な生態系の一部です。小さな彼らの大きな役割に森林生態系の複雑さと精巧さを考えさせられました。

続いてハケ岳演習林に移動し、ミズナラ林の散策とドングリの採種を行いました。ミズナラには間伐を行った利用痕が見られ、昔からこの地域で人々の暮らしに寄り添い大切にされてきたことが分かりました。私たちが今日つくる苗も、この森の様にいずれ森の恵み会の会員や地元の方々に愛されるような森になってもらいたいと、苗づくり活動への思いを新たにしました。一方肝心のドングリの方は、その実りを心待ちにしていた森の生き物たちに先を越されてしまったのか、なかなか見つかりませんでした。それでも林道沿いの沢の中には比較的状态の良いドングリがまだたくさん残っており、数名は沢の中に手を入れてドングリを探しました。切るように冷た

い水の中でもドングリはたくましく芽を出しており、その生命力に命の力強さを感じさせられます。

その後事務所に戻りお昼休みを挟んだ後、いよいよ牛乳パックでの苗づくりを行いました。牛乳パックの口を中に織り込み底に水を抜くための穴をあけ、土を詰めます。そしてそこに思いを込めてドングリを一つずつ撒いていきます。何度かすべての工程を一人で体験した後は、それぞれが自然に分業するようになり、スムーズに作業が進みました。協力して作業を進めたことで約 200 個のパックはあっという間になくなりました。ドングリの植わったパックがずらっと並んだ様子はなかなかのもので、このすべてが（うまくいけば）やがて立派な木となり森をつくるのだと思うとワクワクしました。その森を散策したり材を利用して木工や薪もできたり... と想像も膨らんでしまいます。最後に苗にたっぷりと水を与えて、作業を終わりました。作業が早く終わったので、直撒きしたミズナラの苗や成長した苗の植え方を見学させていただき、解散となりました。

今回、森を実際に歩き、つくる活動に参加して、人と森のかかわり方、森林生態系を形作るたくさんの生き物たちについて考えさせられる時間を過ごさせていただきました。今日植えたドングリたちがやがて森をつくり、そこに私たち人を含めたたくさんの生き物たちの集う日が待ち遠しいです。（島崎）

■ 牛乳パックでミズナラの苗作り

種子集めは、ハケ岳演習林へ移動してミズナラが群生する付近で行った。日本のミズナラは、東西で遺伝的に異なり、清里や野辺山は東グループだそうだ。「DNA の混合を避けるために地場で採取した種を恵みの森で育てる」との説明、「研究者の配慮の細かさ」に感心した。落ち葉に覆われた細い道での種子搜索、初めは困難を極めた。目が慣れないのでなかなか見つからない。数個集めたところで、妻が道の脇を流れる小川の淀みに集まっている事を発見し、数十個を難なく収穫することができた。水中の種子は、中に虫の幼虫が入っていても酸素不足で死んでしまう、と教わった。虫の幼虫で思い出されるのは、数年前に山荘の庭で集めたドングリを家の中の棚に置いたままにして、春の山荘開きで、床に白い蛆が十数匹這いまわっていたのに驚いた経験がある。もっとも虫の幼虫が入っていても発芽率には影響が無く、90% 近くになるとの話だった。

牛乳パックを屋根形の注ぎ口を全開にして内側に折込み、底にアイスピックで穴を開けて、育苗ポットの代わりとする。「各自 10 個を持参」と事前に言われて、育苗ポットなら高さ半分くらいで充分な



のでは、と思っていたが「ミズナラは、根が縦に長く伸びるので、牛乳パック 1 本分の長さが必要」だそう。開口部で内側に折り込んだ部分は、補強と培養土の目安になる。1 本ずつ折り返しと穴あけを指導されたが、穴あけは持参したときに入れてきた段ボール箱に底を上にならべてまとめて穴を開ける方が効率が良かった。手順を確実に知ってもらおうとする指導心を無視して申し訳なく思う。

牛乳パックの育苗ポットができれば、用意された培養土を折り込んだ淵まで入れ、ドングリが入る程度の穴を指で開けて、大きめで重たい種子を投入して覆土する。これを育苗床にならべて散水して完成。全部で 200 以上の牛乳パックが並んだが意外と少ない感じ。2 年後には 1 メートル間隔で牛乳パックごと定植する予定とのことだが、200 個では大した面積にはなりそうも無い。（25m プール程度か）

一連の作業の体験で、牛乳パックを集めるのが大変、最低気温が -20℃の日が何日もあるのに、置いただけの牛乳パックが凍結して苗が育たないか心配、立派な木になるには 20 年かかるプロジェクトの時間軸の長さ等の感想を胸する。（関口）

■ キシヤスデ観察と苗作り

キシヤスデの話は祖母から聞いたり、写真で見たことがありましたが、実際に見るのはこれが初めてでした。今回見たのは地面が見えなくなるような大発生の中ではありませんでしたが、一匹みつけるとあちらこちらと道路の側溝周辺でぞろぞろと歩いているのが確認出来ました。単体で実際手にとってみると思っていたよりも乾いていて固く、可愛らしかったです。毒があるイメージや、大発生で人から嫌がられるイメージがありましたが、ムカデと違い

毒はなく、噛みついたりすることもないとわかりました。また、マツ等の落ち葉を食べて土に返す大事な役割を担っているそうです。8 年に 1 度の大発生の意味が多くの人に伝わればいいなと思います。

ミズナラの苗作りについては、ハケ岳演習林でまずミズナラの林の中を歩き、トリカブト、ササ、ミズキ、ズミ等を観察、解説を聞いた後、道路沿いでミズナラのドングリを拾いました。1 番勉強になったことは、ミズナラが核 DNA と葉緑体 DNA から 2 つに分化しているということです。恵みの森周辺に生育しているのは東日本タイプということで、遺伝的攪乱を防ぐため、拾ったドングリと植える場所を考慮する必要があるそうです。ドングリは時期の影響がなかなか見つけられず、また見つけても虫に食われていたり、小さかったりと、良い状態のものを探すのは大変でした。水の中に落ちたドングリは比較的状态が良いことを教えていただき、20 個ほど拾いました。中にはすでに根を伸ばしているドングリもありました。その後恵みの森に戻り、お昼を挟んで牛乳パック拾ったドングリを植える作業をしました。作業としては牛乳パックの注ぎ口の部分をパックの中に織り込み、底には水抜き穴を 5 つあけます。そして土を 8 分目くらいまで入れて、鍬斗を取ったどんぐりを人差し指の第一関節程の深さの穴に 1 つずつ埋めていきました。この時向きは関係ないそうです。出来た牛乳パックの苗は、名前を書く等して外の畑に並べ、水やりまで行いました。参加者は 10 人程でしたが、作業している内に、コツや知恵を出し合い、1 つ 1 つの行程を分担したことで 30 分程で植えきりました。作業後は去年・一昨年に植えたミズナラの観察と実際に苗から地面に植えるところを見学しました。森の恵み会の活動で今後の成長を見ることがとても楽しみです。（岩下）